

建国大学の夢破れ

五十年入学 稲賀 繁 美

駒場寮の廃寮。それは将来平成の歴史的愚行のひとつの象徴として記憶されることになるだろう。この国のそして世界の将来を我がこととして引き受ける、労多くして報われない仕事に身を捧げる気概を持った少数のエリートという名の「犠牲者」を、この国がもはや制度的には生産も再生産もできなくなったことの象徴であり、国内の不況にもかかわらず外国から見れば世界一の繁栄を誇るべき国が、その国際的な最低限の義務を放棄した象徴であり、また戦後民主主義という名の制度がこの国の土壌でいかなる変質を遂げるほかなかったかを象徴する記念碑として、駒場寮の喪失は祈念されるべきである。この国の将来を憂えて言うのではない、今日の世界で引き受けねばならぬ責務にひたすら無感覚なこんな国など滅びたほうが世界のためだ、その「亡国」に積極的に荷担しようと欲すればこそ、駒場寮を消滅から救うべき策略に加担することからは背を向けて、愚行が愚行として執行されゆくさまを、ひたすら悪意ある傍観者として、強いてやり過ごそうというのである。

1

高級官僚養成学校であった東京帝国大学が、敗戦後第一高等学校を吸収して教養学部として再発するにあたっては、矢内原忠雄第一高等

学校校長らの尽力によって、旧制高校の美点として残すべきを残すという配慮が払われた、と言われている。だが第一高等学校での最後の寮生活を戦後直後の貧窮と栄養難の中で経験した世代が退官を迎える前後で、駒場寮もまたその存続を打ち切られるべき決定に身を委ねた。

いわば全寮制の駒場の生き証人がすべて退場した段階で、そのための施設も寿命が尽きた、との宣告がなされたわけだ。そして第一高等学校から教養学部への移行を経験した世代は、工場動員やスイトン生活の記憶もあって、寮での悲惨な日々につけて良い思いでや愛着をもてない年代に属している。経験者の誰彼の話をついてみても、その数年前に同じ寮で生活した旧制高等学校の先輩の世代とは、およそ掛け離れた認識と価値観が、教養学部第一世代を支配しているように思えてならない。そうした価値観の急速な変貌ぶりは、寮歌集の最期の数年を迎るだけでも容易に実感できるが、その寮歌を哀愁をもってにせよ、嫌悪をもってにせよ暗唱できる最年少世代も、もはや年齢60半ば、あとは伝統の自動消滅を待つばかりである。

いわば駒場寮は、ある世代を出発点として、もはや集団的な青春の思いでの場所とはなくなつた。その断絶の後の世代が駒場のキャンパス政治を担い、しかも大学紛争とそれに続く混乱の中で、第6委員を経験した教官にとつて、駒場寮はひたすら唾棄すべき忌まわしい存在としてのみ認識されるほかない、という不幸な年月があり、そしてその後の世代の教官にとつても、駒場寮が騒音と悪臭と美観の損壊と、そして慢性的な「内ゲバ」殺人や放火による火災や外部劇団の闘

入といった、学生運動の擾乱の火種としてのみ否定的に把握される年月が重ねられた。学生交渉そのものが学生代表の選出基準をめぐる混乱から中断されていた時期もあり、またかりに交渉が成立したところで、出席を強要された教官にとつて、それは建設的な機会というには程遠く、ひたすら罵声をあび、激怒と疲労困憊をのみ要求される損失であり、徒労感のみ募る時間の空費にすぎなかった。

こうして80年代には、駒場寮さえないかつたならば、という雰囲気教授会を支配しないではない状況が、明確に浮上してくる条件が整えられてきた。そこには大学紛争以来の学生運動を根絶させたいとする文部省の25年越の意向が、20年ほどの時代遅れをまったく計算にも入れずに結実しようとしている、という「好都合」な外圧もあつただろう。つまりスクラップ・アンド・ビルドで学生自治を根絶した新寮を立案計画するなら予算はつくが、現状の寮にはもはや補助金も改修費も修理費も出せない、という態度決定である。ガス、光熱費、風呂のボイラーマンや食堂経営、事務室要員の給料に至るまで「行政改革、定員削減」という規制攻撃によって、70年代末からの寮生活の経済的な利点ないしは基礎的な生活用件がひとつまたひとつと掘り崩されていった。また火災か殺人事件でもなければ構内に立ち入れず、その場合でも学生からの罵声と妨害を被るのでは構内の安全確保には警察として責任がもてない、という公式見解を一貫して主張してきた目黒署との関係も無視できない。

その一方で、70年代末まで続いた党派的対立に起因する学内での暴

力沙汰や、学生自治会委員長が学部ストを組織した責任から立場上退学処分になるといった状況は、80年代に入ると急速に退潮していった。

特定政党による支配の不安定化や派閥対立抗争の沈静化によって、もはや自治会が教授会と全面的に対立するという図式は影をひそめた。

それに代わってもつぱら散発的な外部勢力（と大学当局から認識される団体）のキャンパス侵入を前にして、教授会や学部長室が理不尽なまでの労力を費やし、右往左往を強いられる、というように構図が変化してきたように見える。学内にはせいぜい20名内外の「手先」が存在して、外部団体の水先案内をする程度で、そうした「少数派」への対策ならば大学の自治という錦の御旗によって学生ならざる団体を排除するにしくはない。警察導入にあたって暴力反対をマイクで訴えていた自治会長が公務執行妨害で見事「逮捕」されるなどという珍事もあるにはあったが、とにかくそうした擾乱の原因を作る少数派の根城たる寮を根絶すればよい、という認識が、教授会でも取り立てた反対なく納得されるような状況へと推移したようである。

これに並行することだが、寮の自治活動の組織力が急速に低下したのも80年代の現象だろう。入寮選考にあたって実家（これはかつては嫁入りした女性にのみ使われる表現だったはずだが）の収入最高限度額が民青時代には極端なまでに低く押さえられていたが、そのためかえて入寮学生数の著しい低下をきたしていった。これが廃寮へのまことに好都合な根拠として利用されることぐらい、多少の経験があればすぐにも納得されることである。しかし特定の政党の支援もなく先

輩からの助言もはや得られなくなった学生執行部は、こうした危機的状況に組織的な対応を企てる余裕もなく、内部での日常茶飯の政治ごっこに熱中し、自分たちはもはやその由来も知らぬ既得権に安住するまま、形勢挽回の機会をみすみす失っていった。こうした状況判断の誤りは、たとえば留学生の絶対数の増加にもかかわらず、駒場寮を積極的に外国人宿舎として活用するという方針が、学生側から効果的に示されずに終わったことにも見られよう（「アジアとの連帯」を謳ったベ平連の空しさと、その空洞化を象徴する事態だ）。学生満員という既成事実を作り上げて学部交渉で学部側の譲歩を引き出したという話も聞いていない。この間学部側の決定がどのようにして進んでいったか、手元に資料もなく、また知るべき立場にもないので、省略するが（ぜひとも時効の段階で、学生側、教授会側双方の当事者が詳しい「廃寮への軌跡」の記録を執筆して下さることを。また紛争世代の観点と筆者の観点のずれは明らかだ）、長期的な廃寮計画立案においては、教官組織、事務局のほうに軍配が下りるのは、これは事の性質上、いわばハナっから分かり切った話である。秒針よろしき学生のキャンパス滞在サイクルと、いわば分針なみの教官のそれとのずれを考慮に入れるまでもないことだ。だがそれでは時計針まで考慮に入れたときに、はたしてこの廃寮は何を意味していたのか。それを少し考えてみたい。

2

本年はエリート官僚の腐敗と墮落がマスコミを賑わした。高級官僚

のトップの世代が、そろそろ駒場戦後第一世代から10年後輩となってきたことと、これははたしてまったく無関係といえるだろうか。一国の舵取りの責任を担ってきたという自負のあった組織が急速にその自信を失ったことを危惧する論者も多いが、筆者はむしろ日常の多忙のなかで見失っていた自分の姿を見つめ直し、いままで常識となっていた慣例に懐疑の目を向け直す機会が得られたというかぎりでは、様々なスキャンダルもよい薬になるやも知れぬなどと無責任な感想を抱いている。さまざまな規制や慣例でがんじがらめになりながら、それを良いことに危機にも体よく目を瞑り、行く先も見えぬままに流されて来たのが、少なくともここ10年のこの国だった、とそんなふうにみるのは、その間8年間をこの国から留守にしていたよそ者の僻めだろうか。だが食糧問題にしても、国際金融問題にしても、戦後賠償は解決済みという至極真つ当な外交姿勢にしても、銀行の危機や年金の破産にしても、教育問題にしても、医療問題にしても、いずれもこの国一国に閉じた島国の価値観のなかで辻褄を合わせ、利権を追求し、勘定の帳尻を合わせようとしたあげくに、結局そのどれもが出口のない膠着状態と陰湿な内攻へと爆縮し、外の国々からは相手にもされなければ、相手にされるだけの価値もない、顔なき政府開発援助大国へと自閉してしまったのが、いまこの極東の島国だ、という認識は、そんなに間違っていないだろう。なぜこうなってしまったのか。

霞ヶ関の高度に専門的なことは下々の者として弁えないから詳しく追求することは控えるが、きちんとした議論が公にならず、また評論

家先生たちのご意見はひたすら新聞などで垂れ流しにされるだけ一向に政策には結び付かず、永田町の政治による介入には国民がもはや期待を抱かず、そして組織の防衛を第一義とする官僚機構の構成員たちからは、まったく正直な声が聞こえて来ない。そんな自粛と自己検閲と住み分けの構図こそが、この国の動脈硬化の促進に貢献していることは誰にだって明らかだろう。筆者にも分かる範囲に限定すれば、ここ5年間ほとんどそれだけで忙殺されているといっても過言でない大学改革に関しても、いったい将来のこの国で学ぶ大学生にいかなる情報や見識を身につけさせ、どのような倫理観の持ち主として社会に送り出すべきなのかといった議論がまったく不在のまま、ひたすら対文部省交渉、すなわち対大蔵省交渉でいかに概算要求のできるような改組案を立案するか、ということのみが(たとえば「情報教育」という掛け声のもとで)一人歩きならぬ暴走をし始めている。学内のほとんど誰もそのことに疑問を差し挟んだり、積極的にそこに働きかけようとはしないまま、全体のコンセンサスないしは消極的な賛成(つまりは積極的な反対の欠如)という仕組みに安住して、誰の意志でもないのに物事が進行し、そして誰もそれを停めることができずに、保身ゆえか手を拱いて傍観している。

こうした閉塞感のなかで、冒頭に書いたような要求を官僚組織とその構成員に求めるのはもとより無理難題なのだろう。「この国のそして世界の将来を我がこととして引き受ける、労多くして報われない仕事に身を捧げる気概を持った少数のエリートという名の「犠牲者」」

など、この国に望むべくもないようにする仕組みを、この国は敗戦後50年をかけて築き上げたといえるのだから。そしてそうした自滅の原点にあったのが、少数のエリートを「自発的な犠牲者」（これはパレートのいうエリートの定義そのものだ）として制度的に生産し再生産するシステムの廃止だった。ほかならぬ旧制高校の全寮制の廃止がその発端であり、その形骸をも歴史から永遠に抹消しようとするのが、今回の廃寮の歴史的意義である。なに心配には及ばない。国家としてはとくに破産しているけれども多国籍企業がちゃんと居着いてくれるイタリアのような国だつてないわけではないのだから。

3

ここにきてもうひとつ大きく変わったのは、日本で学び研究する第三世界の人々がじぶんたちのおかれた不平等な立場を声高に主張するようになってきたことだ。現在日本の享受している繁栄がいかに第三世界の犠牲のうえに成立しているか。そのことを普通の日本人はほとんど自覚していないし、こんな発言をただけであいつは色つきだとか、ちよつと偏向しているなどといわれかねない風潮がまだこの国では支配的だ。実際国際金融や為替相場の市場原理、また国際市場における価格統制に由来する一次産品の長期的な価格下落、開発援助の債務返済地獄による国家財政の破綻、この三者が絡まって生じる、生存のための無謀な開発とその結果としての自殺行為そのものの環境破壊。そうした悪循環が地球の経済活動の実態であることを、どこまで一般の市民に納得させることができるだろう。いわばバブルがはじけた後

の住宅ローン返済不能による破産同然の状況が多くの第三世界の非産油国の日常となつていることに気づいた学生などは、若さゆえの直情もあるのだろう、現在の世界システムや欧米先進国糾弾へと飛躍してしまいかねない。

だが、そうした欧米の大学で、最近学生を中心に自発的に組織されはじめている *fair trade* の運動といったものも、日本のそれも国立大学などで実現しようとなると、ただちに規制に抵触し、国家公務員の教官や事務官は立場上、積極的に関与することに躊躇してしまう。これが「国内の不況にもかかわらず外国から見れば世界一の繁栄を誇るべき国が、その国際的な最低限の義務を放棄した象徴」であるが、個人としての義務など公務員としての義務の前では霧散してしまうあたりにも、戦時中に軍隊組織で練り上げられた組織倫理が執念深く生き残つて、日本人なる存在の骨格を規定している様がありと見えてくる。

諸外国の若き「エリート」と生活を分かち合う経験を、将来社会の重責を担うほんの一部の学生にだけでも与えうる自治の環境（こうした発想が、日教組のお嫌いな差別教育とは逆の自虐的差別としてのエリート観に立脚したものであることは、すでに触れた）。国を支え国際関係を結ぶ人的な絆を培う共同の場。混在型の国際学生都市を駒場に形成する格好の機会はどうしてあつてなく失われたのか。フランスであれば国際大学都市や高等師範学校寄宿寮といった形態の文化遺産は、いまだにこの国を国際的孤立から救っている。そして戦後多くの

日本人たちがその恩恵に浴した北米への留学と人的交流。戦争の記憶を忌避する姿勢ゆえに果たすべき国際的責任まで回避し、人的資源の養成のために当然払うべき義務をも放棄した経済大国日本。その「つけ」は、20年後にまちがえなく返ってくることだろう。

*

「戦後民主主義」という名の制度がこの国の土壌でいかなる変質をとげるほかなかったかを象徴する「帰結」。「昔きた道」といった議論には筆者の世代は残念ながら実感が沸かないし、むしろ抵抗を覚える。大切なのはどこが引き返し不能地点だったのかを冷静に分析する態度だろうが、それすらも引き返しが可能だったはずだとの認識そのものが偏向していると言われれば仕方がない。だが point of no return がなかったと判断することは、はっきりいえば戦後何も変わらなかったことを容認する立場だろう。一応民主主義のように見える制度が外形だけは設置されたかにみえるけれど、その理念はついに根付くことなく骸化し果てたこと。そのことをおっぴらにしたのが、55年体制とやらの崩壊がもたらした最大の貢献だったのだろう。駒場寮を廃寮にもちこむためにはそれは複雑な民主的な手段が講じられたことだろう。そのひとつひとつのステップがそれなりに責任ある判断を踏んで遡及不可能な手順に則って進められたことは疑われない。だがその結果がはたして当事者の責任ある選択の帰結だったのか、それとも（もとより責任の取りようがない、という意味での）全員の「無責任」の集積として、変更不可能な軌跡を描いた「歴史」の所産だったのかどうか。

なぜ今頃歴史的建造物指定直前（？）の建物を解体する必然性があるのか。名古屋への電車で長柄川の河口堰を目にするたびに、この巨大な愚行の傍らで、消滅間近な駒場の文化遺産がふと脳裏をよぎり、おまわず理不尽なまでの嗜虐性の哄笑に苛まれる。「無用な長物」よ、さらば。